

## 後期：B. 近代日本とキリスト教思想

## 後期オリエンテーション

## 1. 研究の視座と方法

1-1：思想の解釈学的構造 1-2：思想史と社会史

## 2. 明治キリスト教思想の問題構造

2-1：海老名弾正と自由主義神学 2-2：海老名-植村のキリスト論論争

2-3：植村正久と弁証神学1

植村正久と弁証神学2

12/9

2-4：植村正久の日本論1

12/16

植村正久の日本論2

1/6

## 3. 補足的考察

3-1：比較思想研究から 1/13

3-2：社会史と民衆史 1/20

3-3：死者儀礼と宗教的多元性 1/27

## Exkurs

3. 原発と科学技術の神学

4. 宗教言語論の諸問題 12/23

## &lt;前回&gt; Exkurs 原発と科学技術の神学

1 問題

1. 矢内原の現代とわたしたちの現代

・「現代の危機とキリスト教」(1954)、類似性：憲法、教育

「日本の憲法を改正する必要がある否かといふ事が、今しきりに論ぜられてゐる問題です」(131)、「日本の平和憲法の条項は占領終了後の日本の実情に適合しないとして、これを修正して再軍備をし、交戦権を取り戻す必要があるか否か」(132)、「警察法の改正」(134)、「教育二法案といふものが国会で審議中であります。この二法案の趣旨とするところは、従来の義務教育、ことに日本教職員組合のやり方が行き過ぎである。あれを放任して居れば、日本の義務教育は赤化教育になってしまう。それは大変だから、今の中に教育の活動を制限するための立法措置が必要であると、いうふにあります。」(135)

2. 原子力政策の原点（あるいは攻防）としての1950年代

47Newsの特集企画「原子力時代の死角 核と日本人」

(http://www.47news.jp/hondana/nuclear/)

・「1954年には、日本学術会議が「民主・自主・公開」の原子力3原則を採択」、「学術会議の警鐘にもかかわらず、原子力委員会はコールドホール改良型炉の建設を許可、66年に運転が始まった。そして64年には福島第1原発の建設計画が公表された。」

3. 湯川秀樹（初代原子力委員、1956/1-1957/3。委員長、正力松太郎）

京都大学旧湯川研究室同窓会有志「「原発の再稼働」をめぐって各界に訴える」

(2012年4月)

cf. ヤスパース『原子爆弾と人間の未来』(1958年)

4. 政治経済の論理による原子力政策（平和利用）の推進

↓

危機を歴史的に捉えること（人文学）

矢内原、ティリッヒの世代に戻って問題を論じてみる。

2 危機の時代とキリスト教——矢内原忠雄とティリッヒ

5. 現代は核の時代、そして宇宙時代（近代以前と近代以降との間に生じた科学技術の質的变化）

・ハンナ・アーレント『人間の条件』（ちくま学芸文庫、1958）

「一九五七年、人間が作った地球生まれのある物体が宇宙めがけて打ち上げられた。この物体は数週間、地球の周囲を廻った。」(アーレント、1994、9)

20世紀の科学技術は「人間の条件」を変容させる可能性をもっている。

人工衛星：宇宙空間＝「人間の条件の本体そのもの」である地球・大地から切り離された空間領域。「人間の条件から脱出したいという望み」(同書、11)。

「人間の寿命を百歳以上に伸ばしたいという希望」、そして原子力と遺伝子工学。

↓

20世紀の科学技術の意味と両義性

6. 原子力の両義性 → 原発と原爆

従来の選択：危機を感じつつも平和利用論へ

7. 矢内原忠雄

1) 「原子力時代の平和」(1956)

「真の問題はそのような止むを得なかったか否かという点にあるのではなくて、原爆という破壊力の大きい兵器を使用することの罪悪性にあるのです。原子力時代の平和は、破壊力の絶大な兵器の出現によっておびやかされている」

「恐怖心から起る平和の保障というものは底の浅いものであって、戦争の起ることを恐怖心だけで抑えることは出来ないだろう」(162)

「トインビー教授の講演」「原子力という巨大な動力は、平和的な目的に用いられる時には機械的生産方法と結びつき、破壊的な用途のために用いられる時は戦争と結びついている。このように現代は戦争の時代であり、機械化の時代であり、そして原子力の時代であるが、かかる時代において人に自由を与えるものは宗教だろう」(163)

「戦争の破壊力」「生産および生活の機械化」「そういうなかで人間が息をつく場所がなくなり、人間の自由が失われる。機械化と原子力は根本的な意味においては人に自由を与えるのではなく、むしろ人の自由を圧迫するものである」(164)

・軍事利用も平和利用も人間に害を及ぼす

「科学の力をそれほど単純に、無条件に信じ込んでいる」(164)

「科学が進歩すれば、それによって無条件に人が幸福になると考えることは全くの迷信であります。幸福になる面もあるけれども、不幸になる面もあって、原子力時代になっても人は本質的に少しも幸福にならない。不安と不自由とが重くのしかかっている」「皆おびえている状態です」(165)

「原子力時代にあって、動かない心の平和と自由を人に与えるものは、まことの宗教だけあります」(171)

2) 「原子力時代の宗教——科学技術は無条件の幸福を約束しない」(1957)

「原子力の研究は時代の寵児の観を呈し、原子力という前代未聞の強力な動力源の発明により人類の幸福と繁栄にすばらしい前途が開かれるという予想」「原子力神社でも建りそうな勢い」、「原子力神社はまだ末社の方で、その背後には科学技術神社という総本社がある」(173)

「原子力を生み出した科学技術そのものが、人類の生存と福祉を無条件に保障するという思想も、また同様に一つの迷信である」(174)

「原子力時代の一つの特色は、国家権力の増大である。芸視力の研究と応用は巨大な費用を要することと、その大部分が国防上の必要という名の下に行われるということは、この研究並びに応用に対する国家の管理統制を強化する。原子力の秘密を国防上の理由から国家が保持することは、学問研究の自由の要求と衝突する」、「民主主義国も共産主義国も区別がない」「個人の自由を犠牲として国家という祭壇の前にささげさせようという要求である」(175)

3) 「原子力時代の宗教」(1957)

「原子力時代に住んでいる人間は、ますます人間らしさを失って、人間味が乏しくなってくる」「寿命も長くなってきましたけれども、それで果して人生が楽しくなるかという、

必らずしもそうではないらしい」（179）

「学生諸君も簡単に自殺します。これも一種のノイローゼ症状でありましょう」、「ちょっと希望を失ったというだけで虚無感にとらわれ、簡単に死を選ぶという傾向」、「それからもっと大きな問題として、戦争と原水爆で非常な不安と恐怖を人類が抱いている」（180）

「日本でも道德教育の必要がいわれますけれども、道德教育が一番必要なのは政治家でありまして、生徒ではない。そこで政治をよくするためには、教育が必要だということになる」、「原子力時代において人間に自由を与えるものは宗教」（182）

「宗教に帰るといふ時代の要求はあるが、しかし昔から伝わったままの形の宗教には帰れない。伝統的な宗教の中から現代にふさわしくない要素を取り除いて、現代人のたましいをつかむところの宗教にしなければならない」（184）

「人間の体の病気をいやすことを主眼にするものは真の宗教ではない」（184）

「宗教は知識を排除するものであってはいけない」「今日は科学も真の宗教を尊重するし、宗教も科学を尊重するようになってきています」「信仰は知識を刺戟した」（185）

「他の宗教もしくは思想に対して寛容であるか否かということ」（186）

「日本の教育は今や大きな危機に臨んでいる。科学技術教育の振興、自衛隊の増強、民族教育の振興ということが唱えられているが、これらのものをつなぎ合わせてみると、そこに浮かび上がってくるものは決して望ましいところの新しい日本の姿ではない」（198）

#### 4) 「原子力時代の教育」(1957)

「科学技術の目的は何であるか。科学技術は何のために用うべきであるか、という目的意識」（215）

「科学技術の教育は」「技術を何のために用うべきかという、目的を深く考えない欠点をとめないやすい」「科学技術は手段の研究」（216）

「結局、人間の問題」（217）

#### 5) 「原子力時代の思想」(1957)

「原子力の平和利用によって、人類の生産力が飛躍的に進歩することが充分期待されるのであります」

「にもかかわらず反面において、原子力は人類の生産と生活に対し破壊的脅威を与えているのであります」「原子爆弾」「ミサイル」「人工衛星」（222）

「この矛盾と緊張は科学技術の面だけでなく、国際関係においても現今の世界は不安渾沌の時代であると言えます」

・ティリッヒ的には、両義性、無意味性の不安

#### 6) 「科学と道徳」(1959)

「宇宙旅行時代」（287）

「自然科学の研究には巨額の金を出す国も、社会科学や人文科学については、なかなか大きい研究費を出しません」（291）

「経済が非常に進歩して社会における巨大な富の蓄積ができたことが、宇宙研究や実験の前提」「軍部」（292）

### 8. ティリッヒ『宗教の未来』

1) 「宇宙への飛び立ち、そして地球を眼下に見下ろす力を得たことの結果の一つは、一種の人間と地球との間の疎外、人間が地球を対象化(objectification)したことであった。つまり、『母なる大地』から『母なる』という性格を奪ったこと、つまり彼女から、命を与え、養い、抱擁し、彼女のために育て、再び自分のところへ呼び戻す、といった性格を奪ったことである。母なる地球は、完全に計量可能なものとして、観察の対象である大きな物質の塊と化した。」(50)

2) 地球脱出の欲望の前面化が現代の文明内部に大きな不安を生み出した。近代以降の科学技術の進展による不安の増幅。

「人間の不安感は、詩篇第八篇の時代以来、支配する力の中で自尊心とバランスをとっていたのだが、支配する力の増加とともにかえって増加してきたのである」(49)

原子力技術を最初に形にした核兵器において、人間は「自分の所有している支配力を、人類の一部だけでなくそのすべてを絶滅させるためにも用いることが出来るという事実」に直面することになった。「この影は兵器の開発と宇宙探検が互いに結びあわされている限りなくなることはないであろう」(49)。

9. 科学技術の両義性の影の面を認識するとき、キリスト教思想が科学技術に対してもつべき関わり方として、科学技術の批判的監視者としての役割を挙げることが可能になる。人間存在の有限性と罪責性とに規定された科学技術の両義性は、科学技術の力が増大するに比例して、その潜在的な危険性をも増大させることになったからである。しかしこの危険性は人間にとって偶然的な事柄でなく、むしろ科学技術をその本質に組み込んだ文明の運命と言うべきものであった。したがって、科学技術、特に近代以降現代の科学技術に対して向けられるべき批判的な監視の目は、科学技術に根本的に規定された文明全体を視野に入れることが必要になる。

↓

批判と文明的視点

### **3 キリスト教における科学技術論**

原子力時代の科学技術に対するキリスト教・キリスト教思想の関わり

10. ティリッヒの科学技術論、あるいは神律的科学

19世紀の自由主義神学と20世紀の弁証法神学の関係という文脈。

形成 (Gestaltung) と批判 (Kritik)

11. 1920年代後半のプロテスタンティズム論の枠組みで

・プロテスタント原理の構造：「合理（自律）と超合理」と「批判と形成」の二つの軸

↓

・4つの契機

合理的批判：歪曲としてイデオロギーに対する批判

合理的形成：自己同一性としてのイデオロギー（リクール）

超合理的批判：預言者的批判

超合理的形成：恩恵の形態・サクラメント・祭司

12. 合理性と超合理性との関係は、「自律—他律」と「自律—神律」の二つの在り方が可能である。神律は、自律的な合理性に弁証法的に接続された超合理性。

科学技術への対応・議論はこの4つの立場の弁証法的統合によってなされる。

↓

科学自体は自律的科学以外には存在しない。

しかし、「自己閉鎖的な科学」（自律的科学）と、目的設定・批判・根拠付けへと開かれた科学、あるいはこれらの科学外部の契機と自覚的に関連づけられた科学（神律的科学）との相違は存在する。

13. 批判：合理的批判と預言者的批判を結びつけること（神律的科学の第一段階）

たとえば、高木仁三郎の「市民の科学」

『市民の科学をめざして』1999年、朝日新聞社。

『市民科学者として生きる』1999年、岩波新書。

### **4 課題あるいは展望**

14. 個別的なテクノロジーの問題にとどまらず、文明の問題として、キリスト教から文明総体をどう見るかということ。核を組み入れた文明の選択は可能か、そのための文明の条件は、また人間の条件は？

・創造された共同創造者 (Human Being as the created Co-creator)

- ・両義性を前提にした文明という現実
- 15. 超合理的形成という源泉から生み出された豊かな形態化（合理的）の可能性：
  - 神律的文明（第一段階を前提とした第二段階）
  - 神的目的に規定された手段の方向付け
- 16. 現代の課題：キリスト教／世俗的合理性／宗教的多元性

## 2. 明治キリスト教思想の問題構造

### 2-3：植村正久と弁証神学 1

<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/57707/1/asia5ashina.pdf>

#### 1 はじめに

##### 1. キリスト教思想の成立の現場、母胎としての弁証論。

キリスト教思想と弁証論との内的な連関は、現代に至るまで一貫して確認することができる。新しい宗教状況へのキリスト教の登場には、常に弁証という課題が伴っており、それは新たなキリスト教思想の構築を要求することになるのである。

##### 2. 明治日本のキリスト教においても同様。

明治キリスト教の置かれた状況（とくに宗教状況）：西欧近代と日本の伝統という二つのフロントの存在。<sup>(2)</sup>

↓

明治キリスト教は、一方で西欧近代をモデルとして進められた国家の近代化政策とその担い手でもあった近代主義者と対決し、他方では、日本の伝統的な宗教の担い手あるいはその伝統で育った人々と折衝しなければならなかった。

##### 3. 植村正久(1858-1925)：

明治から大正期にかけて日本のプロテスタント教会を指導した伝道者、思想家。「植村正久は近代日本におけるプロテスタント教会形成の重要な中心人物であり、福音主義の信仰を明らかにかけた旗頭的存在であった」（武田清子、2001、9頁）。植村については近年複数の研究書が刊行されるなど、<sup>(3)</sup>すでに一定の研究史が存在している。

##### 4. 熊野義孝「植村正久における戦いの神学」（1966）。植村神学を次のように「戦いの神学」と特徴付けている。<sup>(4)</sup>

「この『戦いの神学』はほかならぬ『戦いの教会』にその座を据えているのであり、そして彼の『戦いの教会』は一方では日本の異教社会に在りながら、他の一方では将来の日本のキリスト教会が欧米諸教会の『出店』に終わらず、世界教会史における自己形成の道を開拓するために、その時勢に対処するうえで触発し促進された必然的な路線である。ここに植村正久の神学的な戦いは教派的論争神学に赴かず、また単なる伝道者牧師の教育手段をもって満足せず、あくまで『真理』そのものを問題としながらいつまでも異教相手の護教論に躊躇することなく、その一生を通じて変わらず終焉の日まで衰弱を示さなかった彼の好学精神をいよいよ『真理への愛』へと導いたのであろう。」（熊野、1966、232頁）

##### 5. 明治のキリスト教思想の批判的検討を行う上で、最適の人物。

植村が26歳で出版した主著『真理一斑』（1884）を中心に、植村のキリスト教思想の検討を行いたい——なお、以下の『真理一斑』からの引用は、頁数のみを記すことにしたい。<sup>(5)</sup>

『真理一斑』は、植村自身の処女作であるだけでなく、日本における「宗教哲学の先駆」（石田慶和）というべき書物であり——清沢満之の『宗教哲学骸骨』（1886）や姉崎正治『宗教学概論』（1903）にも先立つ——、しかも、内容的にもきわめて水準の高い議論が展開されている。また、植村が若くして公刊したこの著書における宗教理解は、その後の植村の思想においても、その基礎として保持されており、<sup>(6)</sup>こうした点から、『真理一斑』を中心に植村のキリスト教思想を論じることは適切であると思われる。

## 2 キリスト教弁証論としての『真理一斑』

6. 『真理一斑』の構成と内容を概観→いくつかのポイントについて考察

7. 『真理一斑』は、第一章「宗教を総説す その一」、第二章「宗教を総説す その二」、第三章「宗教の真理を論究するに必要な精神を論ず」、第四章「神の存在を論ず その一」、第五章「神の存在を論ず その二」、第六章「神と人間との関係を論じ併せて祈祷の理を説く」、第七章「人の靈性無究なるを論ず」、第八章「イエス・キリストを論ず」、第九章「宗教学術の関係を論ず」の、9つの章から構成されている。議論の骨子としては、宗教とは何か、なぜ宗教なのか、を論じる最初の二つの章と、神の存在をめぐる第四、第五章が、本書の中心であり、議論は、宗教一般からキリスト教（第八章と第九章）へと展開される。

第三章（宗教理解のための諸条件）は、第一、二章の補足、あるいは第四章以降への導入であり、第六章（祈祷論）と第七章（靈魂論あるいは人間論）は、それまでの議論の具体的展開と解釈できる。

8. キリスト教的立場は様々な点で前提されているものの、取り上げられる事例がキリスト教以外の東洋思想やギリシャ思想まで広範に及んでいる。<sup>(7)</sup>

考察は基本的に宗教一般について行われており、宗教一般からキリスト教へと議論を展開するという植村の意図。

↓

論述のパターンは、伝統的な自然神学、あるいは近代の宗教哲学（とくに英語圏の）において多くの先例が存在しており、まさに西欧近代の伝統に即しているという意味で「伝統的」。<sup>(8)</sup>

### (1) 宗教論——宗教とは何か、なぜ宗教か——

9. 植村は、宗教一般から議論を始めることによって、キリスト教の弁証を試みている。つまり、議論の出発点は人間にとって宗教の意味であり、植村は形成途上にあった現代宗教学の諸研究をも参照しつつ議論を行っている。<sup>(9)</sup>

10. 植村の出発点は、「人間は本性的に宗教的である」(10)という命題にまとめることができる。たとえば、人類史においては、「宗教の発育が十分」ではないために、「残忍愚蒙の所為をもって毫も愧ずべきことと做さ」ない事例——「慈母にして愛子を猛火に投」じるなど——が見られるが、植村は、これは宗教が非難されるべきものであることの証拠ではなく、むしろ、「蓋し人類は宗教的の動物」であり、「宗教の人心に切要なるを証」(10)するものであると主張する。

11. 植村は体系的な論証を行うのではなく、宗教が人生の重要な問題（「至大の問題」）であることについて——「我いずれの所よりか来たれる、我何のためにしてか存する、我いずれの所にか行く。この三問題は人類をして吾人の講究せざるを得ざるものなり」(13)——、古今東西の思想家に言及するとともに——「古より東西諸国には多くの聖賢世々に輩出し、宗教の真理を講究して人生の疑題を解説せんと企てたり」(22)——、次のように、読者の実感（「意識の実験」）へ訴えようとしている。

12. 「読者は世上の事物煩擾なるに紛れ、……謹厳なる人生の疑題を究察せざるがゆえに、この宇宙に住みて宇宙を知らず。ゆえにかかる思想を理会せざることもあらん。しかれども暫くの間、危座、正念して、自己の状況を静思せよ。」(15)

13. 人間はその有限性ゆえに、理性を超えた無限なるものや永遠なるものを求めざる得ない。すなわち、「吾人の脆弱、短命なるを悟るときは、全能なる永住者を想わざるをこと能わず」、「無限者にあらざれば、わが心の望み遂ぐるに足らざるなり。この無限なるものとは何ぞや。この絶対なるもの、いずれの所に在るや」(18)。植村の議論は、有限な人間存在に無限への問いが内在していることを論じるものであって、したがって、問題は、この無限なるものへの接点がどこに見いだされるのかということになる。

14. 「人類の良心及び罪惡の觀念は宗教を生起するにおいて、大いに力ありしものなりと

論ず」（20）、「万物の原因を探るを本色とする宗教の起これる一原因なり」、「宇宙の原因論に直進して止まず。」（21）

↓

このように、植村が注目するのは、宇宙の起源・原因と人間の良心という二つの問いであり、この点で、植村は西洋の自然神学の伝統的議論に多くを依存している。植村は自然神学的な議論についての広範かつ確実な知識を有していたこと。

## （2）神の存在あるいは存在論証

15. 神の存在は、宗教の基礎であり、宗教を論じる場合、神の存在の問題は議論の中心に位置付けられねばならない——「神の存在は天下万教の基趾なり」（50）——。

植村は、宗教を論じた後に（第一章～第三章）、「神の存在」（有神論の大要）へと論を進める。この部分は、質量共にまさに本書の中心をなしている。

つまり、キリスト教の弁証は、神の存在の弁証を不可欠のステップとするのである。しかし、植村の議論の特徴は、伝統的な神の存在論証を中心に議論を展開するだけでなく、むしろ、有神論の主たる論敵を無神論、懐疑論、唯物論に絞り込み、そしてそれらの問題点を集中的に論じる共に、それに先行して有神論の倫理性へ言及している点に認められる——これは、後に論じるように、19世紀の西欧のキリスト教思想の状況だけでなく、明治期の日本の思想状況をも反映しているように思われる——。

16. 植村は、「天下神なしと言うほど難きこと有らざるなり」（51）、「無神論を唱うること有神論に比ぶれば、更に困難なるものありと言わざるを得ず」（53）と述べ、無神論が論理的に困難であることを指摘することから、議論を開始する。

「神の存在を証せんには、僅かに宇宙の一小局部にてもその証拠とすべきものあらば足れり。しかれども純然たる無神論を左証せんと欲せば、その際涯を究めがたき宇宙をことごとく究察せざるべからず。」（52-53）

17. 或る存在者が「存在しない」ということの完全な検証にはしばしば無限の時間と能力が必要になるのに対して、その反証は「存在する」という一つの事実を指摘すれば十分である、という論証の持つ特性に関わる議論。

しかし、植村の意図は、「吾人もし真正の無神論を唱うるに至らば、敢えて生命をも物憂く思うべきはずなれど、その実際は仮面の無神論者にして、口に論ずるほど心には確と神なしと思うにあらず」（51）とあることからわかるように、しばしば安易になされる無神論的な言明（「仮面の無神論者」）に対して、議論が真剣になされるべき実存的な問いであることの自覚を読者に促す点にある。

18. 論者の倫理：性植村が、神の存在をめぐる議論は、思想的な流行や風潮に乗って気楽な気分になされるべきものではないと考えていることは、これに続いて、「有神論の倫理を論ず」という表題の付いた議論がなされる点からも確認できる。つまり、有神論と無神論をめぐるのは、論証の論理性だけでなく、論者の倫理が問われねばならない。

19. まず、有神論の立場に立てば、神を愛するのは当然の義務であって、「有神論の倫理は極めて明らかなるもの」である。すなわち、

「蓋し上帝は天地の主、先民の大父にして、吾人は昼となく夜となく、断えずその愛育を被ぶるものなるがゆえに、これをして果して存在せしめんか、すなわち心を竭し、精を尽くしてこれを愛すべきこと、もとより論ずるを待たず。」（54）

20. 問題：神の存在を知らない場合に、神を敬愛する義務はどうなるのか。<sup>(10)</sup>

植村は、或る人が他人から恩義を受けた場合、もし、その他人の所在を知らないとしても、その人の恩義に感謝するのは当然であって、もし、恩を恩とも思わないならば、その罪を非難されるべきである、という例を挙げながら、「吾人はすでに未知の上帝に対して不虔の罪を負うこと必ずしもこれなしと言うべからず」（55）、神の存在を明示的に知らないからといって、神への義務が無くなるわけではないと主張する。

↓

有神論と無神論の論争は論理的レベルにとどまらず、むしろ「最も切迫なる倫理上の義務」に関わっている。

植村は、伝統的な自然神学の問題を、「未知の神」に対する倫理的責任として捉えようとしているわけであり、これは植村が神をいかなる事柄として理解していたかをよく表している。「神は、必ず無神論者を審判するにその論の由って起これる事情を酌量して、これを責罰することならん」(56-57)。

21. 有神論あるいは自然神学の起源と歴史：思想史的視野から、「神の存在」の問題へ。「紀元前六百年の頃より、諸国の人民究察の精神を發揮し、理学の思想大いに興起せり。……六百年の頃に至り、徒に皮相の知識を有するに安んぜず、事物の理由及びその由来を講究することを始めたり。」(68)

この紀元前六百年頃の人類の思想的転換を体現した人物として、植村は、インドの釈迦、中国の孔子、ペルシャのゾロアスターを「ほとんど同時代の人」として挙げる。こうした議論はヤスパースの「基軸時代」(Achszeit)説にも通じるものであり、<sup>(11)</sup> その点からも興味深い。

22. こうした思想的転換(合理的倫理的な思惟の成立)から、「宇宙原始論」(万物の起源の探究)は開始されるが、「許多の成績を生じたるものは、ギリシアの哲学に如くはなし」と言うように、植村は、とくに古代ギリシアの自然哲学から始まる哲学的思惟の発展を高く評価している。古代ギリシアの思惟は、西洋における宇宙の起源探究の出発点であり、その後、「西欧の学術世界には天地の原因を論ずるもの絶えず」(70)、その影響は植村が生きる現代(19世紀)に及んでいるのである。

23. 西洋の自然哲学あるいは自然科学における宇宙起源論に関する植村の説明の要点は、次の二点にまとめられる。まず、第一点は、宇宙には原因(第一原因)が存在することである。

「今の学術の開示するところによれば、天地の現状はもとより始めありしものなり」(71)、「吾人は開端の原因無きものの連鎖は真正の原因にあらざるを記憶せざるべからず。」(72)

24. 宇宙内部の諸存在や諸出来事はすべて、因果律によって原因と結果の連鎖の中に組み込まれているが、その場合、開端の原因(第一原因)の存在を認めざるを得ない。これが科学(学術)の示す事実であるというのが、植村の主張である。「宇宙の現象をして原因の無数なる連鎖承続に依らしむるものは、天地に原因無しと言うに同じ」(72)という議論は、トマス・アクィナスの『神学大全』にも見られる有名な議論であり、<sup>(12)</sup> 植村が自然神学の伝統的議論に依拠していることは明らかである。

25. 植村は、第一原因の存在の主張を補強するために、カントやライプニッツなどの西洋哲学の代表的な議論へ言及している。「カント曰く」、「究極に至れば独立自在の原因に遡らざるを得ずと。人心はこの高点に達せざれば、決して満足するものにあらず」、「蓋し物の原因なるものは結果を生ずるに相当なる資格を具有するを要す。ライプニッツは、これの理を名づけて合当理由の法則と言う」(73)。もちろん、こうした議論が宇宙全体に適応できるかは自明ではなく——カント解釈として問題的——、また当時の自然科学において宇宙の永遠性の問題が解決済みの問題だったわけではないとしても——少なくとも膨張宇宙論によって描かれるようなこの宇宙の原初状態(超高温高密度)が科学的に示されていたわけではない——。しかし、科学的知見が第一原因の存在を支持しているという植村の主張は明瞭である。

26. 議論の第二点は、「第一原因は神である」という論点。ここに論理の飛躍があるのはその通りであるが、<sup>(13)</sup> ここでも植村の議論の内容は独創的で詳細な自然神学を提示するというよりも、伝統的な自然神学の概略を自らの目的に沿って示すにとどまっている。その目的とは、次章で論じる唯物論的な無神論や懐疑論の論駁であり、それを通して、神の存在を思惟することの蓋然性を読者に理解させることに他ならない。

27. 有神論と無神論の共通前提としての自然哲学：議論の多くは論敵とされた思想的立場への反論に向けられている。とくに興味深いのは、宇宙の究極的な原因探究(第一原因に



S. Ashina

関わる第一の論点)が、有神論と無神論との共通の思惟方法として位置づけられている点である。つまり、「天地原始論」は、有神論者だけでなく、無神論的な進化論者ティンダルも「ベルファースト演説の開端」で論及した問題であって、「スペンサーのいわゆる宇宙に係われる先天の解説に外ならず。彼の無神論者といえどもまたこの範囲のうちに在るものとす」(71)。このような共通前提の下で、無神論者との論争は進められる。

28. 第二の論点に関わる宇宙論的な自然神学を補強する議論として、カントの実践理性批判(実用理性)——道徳的命法(無上大法)、徳と福の一致、良心論——が引用される。「カント他の事物より、神の存在を証するに付いては、多少異議を唱えたれど、良心の証左を確信して疑わず」、「良心は上帝の存在を明らかにすと」(98)。

↓

以上の二つの論点から得られた結論は明瞭である。すなわち、「吾人はこの天地人物の経綸を観察して、上帝の聖徳を少しく窺い知ることを得べし」(74)、「そもそも天地は上帝が自叙の伝記なり」(75)。

### (3) 祈禱論

29. 植村は、神の存在の議論からキリスト教信仰へと直ちに論を進めるのではなく、神と人間の関係論をその間に挿入する。というのも、神の存在についての理論的な知識だけでは、キリスト教信仰へ到達するには不十分だからである——「余は前章において、すでに神の存在を略説したり。本章においては、神と人との関係を論ぜんと欲す。蓋し単に上帝の知りたるのみにては、人心の要求を満足するを得ず」(108)——。

↓

キリスト教信仰へと進む前に、植村は、次の三段階で構成される「神と人間の関係論」を論じる。

「人類の上帝を求め、その存在を究知するの順序を示せるなり。先ず第一に、吾人は天地人生の状況を観察して、その理由を求め、その解説を探らざるを得ず」、「次に良心醒覚して、霊性の渴望を刺激し」、「第三に、親しく上帝と交和し、父子ただならざるの念を提起するは、実に神を獲たるものと言わざるを得ず」、「実験を得たりと思考す。」(109)

30. ここでは、以上の「神と人間の関係論」の全体を検討するのではなく、こうした議論の具体例として論じられた、祈禱論。

植村が宗教を人間の本性に属するものと捉えていた点については先に確認したとおりであるが、これは、まさに祈禱にも当てはまる。すなわち、「蓋し、祈禱は人類の天性に発したるものなり」、「人は祈るところの動物なり」(115)。祈禱とは、「その第一の主意は、上帝の徳を慕いてこれを交親し、相思、相愛の情を通ずるに在」るが、神の存在を知的に認めることから進んで、神と人格的な交わりを得るに至るとき、そこに祈禱という体験(実験)が成立する。

31. 祈禱は、感謝、祈願、懺悔、取り成しなどの諸要素を含んでいるが、とくに、祈願との関係で、古代から様々な仕方で議論がなされてきた。<sup>(14)</sup> 植村は、祈禱を論じるにあたり、キリスト教祈禱論の古典的な問題を取り上げる。つまり、神仏に頼る(祈る)ことは弱さのしるしか、聞き届けられない祈りについてどのように考えるか、という二つの問題である——これらは、明治日本においても、おそらく祈禱をめぐる問題化していたものと思われる——。

32. まず、祈禱と弱さの問題。祈禱が神に祈願という要素を持つことから、しばしば祈禱は神への依存性(すがる、頼る)、つまり弱さの現れであると議論される。心身の強い人間、自律的な人間は神に祈る必要はないという主張——祈禱に限らず、宗教全般についても、投げかけられる批判であるが——に対して、植村は歴史上の人物(たとえば、物理学者ファラデー)に言及しつつ、「真正の英雄は非常に信ずるところありて、その勢力と気力とを上天より受けたるものなり」(117)と反論する。

もちろん、これは「祈る=真の強さ」の証明ではないものの、「祈る=弱さ」の反証と

しては説得力がある。「自修自進の道によって、正善の域に達せんとしたる者」は少なくないが、「かくのごとくして養成したる品性は、秀美の最高等なるものにあらず」(116)。むしろ、「高貴なる品性とは、自遜に基づくものなり」(ibid.)。「祈祷は人の心を寧静、純良、勁健ならしむるものなり。またよく困難を軽うし、憂愁を解き誘惑に勝つ力を与え、罪惡に抗するの勢いを得せしむ」(117)。

祈祷は人間の弱さのしるしであるどころか、人間は神に祈ることによって、惡に打ち勝つような真の強さを得ることができる。これが植村の結論である。

33. 次に、祈りの聞き届け、聞き届けられない祈りの問題。この問題は、そもそも祈りにおいて何を祈るべきなのかということに関わるいわば祈祷論中の難問である。

この問題に答えるに当たって、植村は祈願の内容を、個人の利害を超えた社会正義や道徳に関わるものと、個人の利害や損得に関わるものに分けて議論を行う。

すなわち、「道徳上に係る事物に就きて祈るときは、それを誠実に求むれば、必ずわが乞うがごとくに応驗あること疑うべからず。しかれども世間生平の事物につきて祈るときには、然らず」(118)。植村は、社会正義や道徳的な事柄について、神が人間の心からの祈りに応えることは疑いもないと述べる——もちろん、神の応えが人間が欲する仕方においてであるかどうか、また祈りが直ちに応えられるかは別にして——。

問題は、個人的な事柄(「世間生平の事物」)についての祈りの場合である。道徳上の事柄の場合と異なり、個人の利益損得に関わる願いには様々な心の歪みや欲望が反映する恐れがあり、もし個人的な願いのそのままの実現を求める場合には、神との人格的交わりとしての祈りは呪術と等しいものになる。これについて、植村は、「あにわが浅薄、疎漏なる意見に拘泥して、上帝の措置を指揮するを得べけんや」(ibid.)と指摘する。かと言って、個人的な事柄について祈るべきではないということではない。そうではなく、「確乎として信ずきところなれど、果してわが祈れるごとく応驗あるや否やを知るべからず」(ibid.)という点を、わきまえておく必要があるということなのである。したがって、この問題に対する最終的な答えは、次のようになる。「ゆれにわが一切の利益を神に委ね、死生命あり」(118)、「順境、逆境の別なく、我はただその境において、上帝を信ず」(120)。

#### (4) キリスト論——聖書のキリスト像——

34. 神の存在、そして神と人間の関係についての議論を経て、いよいよ植村の論述は、キリスト教信仰へ到達し、宗教一般からキリスト教へという弁証論のプロセスは完結。

ここで植村のキリスト教についての論述は、聖書テキストに基づくキリスト理解(聖書のキリスト像)をめぐる展開される。

35. 植村は後に、新神学問題や海老名弾正との論争では、伝統的教義的な聖書解釈とそれに基づくキリスト理解を主張することになるが、<sup>(15)</sup>『真理一斑』におけるキリスト理解は、内容的に見て、後の議論の原型と言える。つまり、その結論は「キリストの神たること明らかなり」(164)ということであって、この結論を導くために、植村は次の5つの論点において、聖書のキリスト像の特徴を整理する。

「第一 キリストの過誤罪惡無きを弁じ、その聖徳實に至れるを明らかにす。」(150)

「第二 キリストの聖徳は、完全美備、普く万世万国に通じて、吾人の標章模楷となすべきものなるを論ず。」(155)

「第三 キリストの品性は衆美を兼ね、衆徳に具有して、過不及の跡を見るべからず。」(156)

「第四 キリストの常に自ら覚知し居りたることは、最も驚くべき事実なり。」(158)

「第五 イエス・キリストは許多の酸苦に遭いて、ついに十字架に釘せられたるを論ず。」(159)

36. 聖書において描かれるキリストは、十字架に至る苦難を受けつつも、罪や惡を完全に免れており、あらゆる徳と美を完全に過不足なく具現している点で、歴史上の他の優れた偉人や聖人に勝っている。まさに、キリストは全人類の模範であって、キリストはこのよ

S. Ashina

うな自らのあり方をはっきり自覚している。植村は、こうした聖書のキリスト像については、聖書を素直に読むならば、否定できる者はいないと主張する。すなわち、「宗教がこの人をもって人類の理想、模範となしたるは選ぶ所を錯らざるものと言うべし」、「非キリスト教徒といえども、これに反対するを得ざるなり」（153）。

37. 植村の聖書解釈については、海老名との論争がそうであったように、近代聖書学の方法論を承認する立場から、当然批判が投げかけられざるを得ない。

『真理一斑』において、植村はこうした問題点には言及することなく、議論を進める。

38. その点で、聖書のキリスト像を論じる第八章の論述は、それまでの各章の論理的な論述態度と比較的も、やや異質であるとの印象を受けざるを得ないであろう。それは、この章が、「その聖名は世々無究に崇められるべきものなり。アーメン」と締めくくられている点にも表れている。植村にとって、イエス・キリストに関わる信仰内容の論述は、それに先行する、宗教から神の存在、そして神と人間の関係という議論とは質的に異なる性格を有していると言うべきかもしれない。

39. こうした問題点が存在するとしても、聖書のキリスト像を認めるならばキリストが神であることについても論理的に認めざるを得ないという植村の議論はきわめて興味深い。つまり、聖書が描くような特質を有するキリストという存在者は、神でないとするならば、「己れを欺くの愚人か、もしくは人を欺き、世を瞞着するの悪人たらざるべからず」。したがって、「キリストは実に神か、はた天地の容れざる悪人か」のいずれかであって、その判断は読者の責任に委ねられている。「読者は二者のいずれかの点に己れの論拠を取らんとするや。イエスをもって真正の君子万世の儀表なりなどと明言しつつ、なおこれが神なるを認めざるものは論理上の罪人なり」（164）——有神論の倫理性——。こうして、聖書のキリスト像を認める人は、「キリストの神たること明らかなり」（164）という点も受け入れざるを得ないという結論が導き出される。

#### 注

- (1) キリスト教思想と弁証論との関わりについては、芦名(1995、25-38 頁)を参照いただきたい。
- (2) キリスト教思想研究における「フロント」概念については、芦名(1995、26、51 頁)の説明を参照いただきたい。なお、こうしたキリスト教思想史研究の方法論をアジア・基督教研究という視点から論じたものとして、芦名(2005)も合わせて参照のこと。
- (3) 近年出版の植村正久についての研究書としては、佐藤(1999)、武田(2001)、大内(2002)が挙げられる。
- (4) 「戦いの神学」という表現は、「戦い」に伴う影の面についても、まさに植村の基本性格に合致するものと言える。つまり、「戦い」には敗者が存在するということである。佐藤敏夫は、その植村研究書の「第一四章 植村の傳道局支配」において、「日本基督教会において植村が絶大な権力をもつようになるのは結局伝道局を握ったからだという見解がある」（佐藤、1999、115 頁）という点について論じているが、確かに、「絶大な権力」は、「宣教師に支配されない教会を造る」（同書、118 頁）ために必要な「剛腕」であり、その「努力」の積極的な光の側面は正当に評価する必要がある。しかし、松尾重樹が石原量研究（『近代風土』に1980年から1990年にかけて、掲載された「石原量の生涯」など）という面から論じている植村像が果たして、「宣教師と協力しつつ、日本人の主体性を失わず、日本人による日本の教会を建設しようとした」「努力と苦心」（同書、125 頁）という仕方で解し得るものであるかは、さらなる解明を要すると思われる。植村を始め、明治の指導的なキリスト者について、今後なされる研究は、その影の面をも公平に論じるものでなければならないであろう。
- (5) 『真理一斑』については、『近代日本キリスト教名著選集 第I期 キリスト教思想篇』（日本図書センター、2002年）の第一巻によって、その初版（警醒社書店より出版）を利用することが可能であるが、本論文では、『植村正久著作集』（新教出版社）の第

- 4巻（1966年）に所収の版（現代表記に近い形に改めている）から引用することにした
- また、植村に関連した基本的な資料や諸文献を収録したものとして、佐波亘編『植村正久と其の時代』（全五巻、補遺・索引、新補遺。教文館）はきわめて重要であるが、『真理一斑』に関しては、第五巻の「七」（188-199頁）で扱われている。
- (6) 宗教理解の一貫性は、本論文で取り上げた『真理一斑』の第一、第二章の宗教理解と、その40年後に書かれた「宗教とキリスト教」（『植村正久著作集5』新教出版社、130-141頁）とを比較すれば、明瞭である。たとえば、「第一 宗教は世界の至るところ、人間共通の事実である。それは人の天性に出ずるからである。宗教は自然であり、無宗教は不自然である」（同書、130頁）は、『真理一斑』の宗教理解の要点に他ならない。
- (7) この点は、たとえば、第二章で言及される人名をリストアップするだけでも、一目瞭然である。名前だけの言及としては、コロンブス、ソクラテス、プラトン、ペーン、ヴォルテール、ヒューム、ハミルトン、コント、ユスティノス、ネアンダーらが、また引用や思想内容の説明とともに挙げられる人名としては、ミル、スペンサー、ケアド、釈迦、孔子、荘周、白居易など確かめられる。なお、『真理一斑』では、聖書のかなり長い引用が漢文でなされている（第一章ではローマの信徒への手紙7:15-24、第二章ではヨブ記28:1-23など）。
- (8) 『真理一斑』については、本論文で使用した版が収められた『植村正久著作集5』の「解説」（同書、502頁）で、熊野義孝が高坂正顕の言葉として引用している次の指摘はまさに的確なものと言える。「今我々が『真理一斑』を読んで痛感することは、当時にあつてよくこれだけ内容の豊かな、潤いの多い書物が書けたものだという驚嘆の念である」（高坂正顕『明治文化史』〈四・思想言論編〉所収）。しかし、同時に『真理一斑』から感じられるのは、植村の思想史理解の背後にある思想研究の伝統である（おそらくは英語圏の）。植村の「宗教理解」「神の存在」などの扱い方は、英語圏における宗教哲学の著作と類似しており、植村がどのような先行研究に依拠しているかということは、植村の思想形成を理解する上で、重要な研究テーマとなるように思われる。
- (9) ここで言う「現代宗教学」とは、経験科学の方法論を用いるものとして、1870年代頃に開始された新しい諸宗教研究の総称を意味しているが、植村の『真理一斑』はまさにこうした新しい実証的な宗教研究の成立期に重なっている。たとえば、第四章の「三有神論の起源いずれの所に在りや」（57-67）では、有神論の起源をめぐる学説を、「進化説」（ヒューム、コント、スペンサー）、「天啓説」、「推究の説」（スマイス）、「天然の傾向」（ヘンリー・ビー・スミス）と整理する中で、現代宗教学の知見を取り上げている——59頁に見られる、「原始拝物教」「原始一神教」「多神教」との関連で一神教の起源を論じる議論など——。
- (10) 「有神論の倫理」に関する植村の議論は、神の律法が被造物を通してユダヤ人だけで異邦人にも現れており、律法を知らないという弁解は通らない、という「ローマの信徒への手紙」の有名なパウロの議論を思い起こさせる。このパウロの議論は、しばしばキリスト教的自然神学の源泉と評価されるものであるが、『真理一斑』の第一、第二章での宗教論は、人間本性における宗教性という議論を立てる点で、パウロの議論を、19世紀末の思想状況でやり直したものと言えるかもしれない。
- (11) これは、ヤスパース『歴史の起源と目標』の有名な議論であるが、その内容の概略については、芦名（1993、10-11頁）を参照。
- (12) 「しかしこの系列を追って無限にすすむことはできない。なぜならその場合には、何か第一の動者は存在しないことになり、したがってまた他のいかなる動者も存在しないことになるからである」（山田晶責任編集『トマス・アクィナス』中央公論社、1980年 130-131頁）。
- (13) 「第一原因は神である」ということの問題性は、植村自身は唯物論の立場として紹介している、「第一原因は物質である」という論理的可能性を考えれば、明らかであろう。そもそも、神概念と第一原因という概念が同一であるとの議論は自明ではないし（キリ

S. Ashina

スト教的な自然学・自然哲学では、自然な推論とも思われるが)、また宗教経験における「神」が第一原因と言いうるかはさらに疑問である。「神の存在」の議論と「イエス・キリスト」の議論の間に、祈祷論を含む、神の人間の関係性の議論を入れたということから、植村もこの点に気づいていたと推測することができるかもしれない。

(14) こうした祈祷論の古典としては、オリゲネスの祈祷論（小高毅訳『祈りについて・殉教の勧め』創文社、1985年）を挙げることができるであろう。オリゲネスの祈祷論では、植村が扱う第二の問題、何を祈るべきか、祈りは聞き届けられるか、を中心に展開されており、宿命論的決定論との対論という古代の状況がその背後にあることがわかる。

(15) 海老名と植村のキリスト論論争については、芦名(2006)を参照。

### 文献

芦名定道(1993)『宗教学のエッセンス——宗教・呪術・科学』北樹出版。

(1995)『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社。

(2005)「アジア・キリスト教研究(1) —その視点と方法—」『アジア・キリスト教・多元性』(現代キリスト教思想研究会)第3号。

(2006)「アジア・キリスト教研究(2) —方法と適用—」『アジア・キリスト教・多元性』(現代キリスト教思想研究会)第4号。

(2007)『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房。

石田慶和(1993)『日本の宗教哲学』創文社。

大内三郎(2002)『植村正久——生涯と思想』日本キリスト教団出版局。

熊野義孝(1966)「植村正久における戦いの神学」『日本のキリスト教』(熊野義孝全集第十二卷)新教出版社。

近藤勝彦(2000)「植村正久における国家と宗教」『デモクラシーの神学思想自由の伝統とプロテスタンティズム』教文館。

佐藤敏夫(1999)『植村正久』新教出版社。

武田清子(2001)『植村正久——その思想史的考察』教文館。

#### ・文献追加

崔炳一(2007)『近代日本の改革派キリスト教——植村正久と高倉徳太郎の思想史的研究』、花書院。

土肥昭夫(2012)『天皇とキリスト——近現代天皇制とキリスト教の教会史的考察』新教出版社。

「III 近代天皇制下のキリスト教指導者」第七章 植村正久の天皇制論

鄭玟汀(2013)『天皇制国家と女性——日本キリスト教史における木下尚江』教文館。

「第四章 植村正久の「武士道」論——日清・日露戦争とキリスト者」